

新春

文芸

市内発見の中国コイン



土浦市立博物館長
上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長 茂木雅博
茨城大学名誉教授

市民の皆さま 新年おめでとうございます。

昨年秋には奈良国立博物館で土浦市と関係深い鎌倉時代の律僧忍性の生誕八百年記念特別展が開催され、土浦市立博物館からも多くの文化財が貸出・展示されて大変好評を博しましたことをご報告いたします。これも市民の皆さまのあたたくいご支援のたまものとお礼申しあげます。

さて今回は、市内田村町の国道354号線(かすみがうら市から木田余方面に抜ける国道)工事に伴う下郷古墳群しもごうの発掘調査で、平成9年に発見された「半両銭」1枚と、同じく市内木田余東台の御冥遺跡ごめいから昭和63年から平成3年にかけて行われた木田余土地区画整理事業に先立つ発掘調査によって発見された「五銖銭」1枚についてご紹介したいと思います。これらの貨幣は双方ともに中国の前漢代(紀元前206〜後8年)を中心に製造され、その後我が国に伝来したものであります。

半両銭は中国、秦しんの始皇帝しこうていが、円形の貨幣の中心に方形の穴を開けた銭に統一した最初のもので、中国では銅銭は重さの基本単位で、1斤きんは16両、1両は24銖、1銖は約0.59グラムです。半両銭は秦代から漢代にのみ製造されました。始皇帝が製造した銭は十二銖半両、漢代の少帝しょうていの八銖半両(紀元前186年)、文帝ふんていの四銖半両(紀元前175年)といわれます。これによると、下郷古墳群で発見された半両銭は2・3グラムの重さから推定して、最後に製造された文帝時代の貨幣であると思います。

五銖銭は前漢の武帝が元狩4年(紀元前119年)に初鑄造し、隋代(589～618年)まで使用されました。しかしこの貨幣はしばしば改鑄されたために、形体や字体に変化が多くみられます。なお中国では、一銖銭として新の王莽が始建国元年(9年)に小泉直一という五銖銭一単位の価値を有する小銭を鑄造していますが、我が国では発見されておられません。

今回紹介した2枚の中国コインはどんな遺跡から発見されたのでしょうか。半両銭の出土した下郷古墳群は、昭和55年7月老人福祉センター「湖畔荘」建設によって記録保存後一部が削平された遺跡で、その折南側の円墳(2号墳)は遺存状態が良かったので保存されました。平成9年度、この古墳を避けて国道が敷設されることになり発掘調査が実施され、縄文時代から中世にかけての複合する遺跡であることが判明しました。その一角に中世末期(15～16世紀頃)の石塔を伴う土坑が発見され、この付近で発掘されたものです。古銭はほかに、中国北宋時代の皇宋通寶(1038年)も発掘されました。五銖銭は御霊遺跡のSX・2号と命名された中世土坑から発見され、北宋時代の嘉祐元寶(1056年)、元祐通寶(1086年)の2枚が一緒に出土しています。

以上の事実から、これら二枚の中国コインは弥生時代の遺物ではなく、中世の埋納銭と同じ性格の資料であり、同様の遺跡は千葉県や長野県でも確認されています。平安時代の末から鎌倉・室町時代(中世)にかけて貨幣経済が活発になったため、中国の宋や明王朝の貨幣を大量に輸入して、日本全国で利用していました。

このような中国のコインが、渡来銭として市内の遺跡から発見された意義は考古学上大変貴重なことであります。ちなみに半両銭の弥生時代遺跡からの発見は、北九州を中心に現在5遺跡24枚、五銖銭は5遺跡100枚が発見されるにすぎません。ただし両銭ともに福岡県沖ノ島から祭祀遺物として前者が20枚、後者が96枚発見されており、他の4遺跡はいずれも各1枚のみです。こうして見ると、これらの銅銭がわが国に伝来したのは当時の威信財あるいは神祭の祭器とされていたことが証明されます。こうした文物が後世の土浦から発見されたものでしょう。



半両銭(右は拓本)
(下郷古墳群)



五銖銭(右は拓本)
(御霊遺跡)